

来ました。昭和二十二年一月十五日でした。何の土産もないが「シラミ」がいるかもわからん、といった時の母の驚いた顔忘れられません。

幸いにも家は商売が忙しく家の手伝いをする事になり、二人の子供、四人の孫に恵まれ幸せな生活を送らせて戴いています。

孫達の前で兵隊やシベリヤの話を聞かせていた時、孫が「おじいちゃんが苦勞して無事に帰って来てくれたお陰で、私達がこうして元氣にいるのやなあ」といったことがあります。全くその通りで運命の不思議、生かされている有り難さ、感謝せずにいられません。二度と戦争がなくいつまでも平和で幸せであることを念じ、不幸にも亡くなられた戦友のご冥福を心よりお祈り致します。

北鮮經由復員記

佐賀県 田中菊治

昭和二十年八月十日、下城子官舎の家族を無事に牡丹江の家族収容部隊に引き継ぎ、図們の本隊に合流した。

本隊は図們後方の山地に陣地を構築してソ連軍の侵入に備えていた。私は本部付となり連絡兵を命じられ、各所に散在して陣地を備えている各中隊への連絡に当たっていた。

極度に緊迫した状況の中でも直ちに戦火を交えることもなく数日が過ぎ、八月十六日になったころ、本部の將校、下士官の間になんとなく動揺が感じられた。兵の我々にはわからないが緊迫した気配がヒシヒシと身に迫ってくるものがあった。

翌日になり図們駅集合の命令が出、被服も一装用を支給され、真夏というのに冬衣も携行せよとの指示で

あつた。またその夜、珍しく酒、甘味品まで配られた。

本部連絡係の上司に久保真軍曹（福岡県）、同僚に芹田兵長（佐賀県）がいた。同じ九州同志とあつてお互いに行動を共にしようと話しあつていた。久保軍曹が明日の集合は局地的なもので、一時停戦であるいは捕虜になるのかも知れない？それよりも後方には有力な部隊もいるのだ。坂本隊長は連絡のために延吉に出発された。我々も隊長の後を追つて行こうではないかと話し合い、三人で脱出することに決めた。

夜半ひそかに本部幕舎を出て中隊幕舎の前にくると、もうすでに出発準備をした人たちが寝もやらず焚火を囲んでいた。連絡用の腕章は着けていても、気付かれないようにして部隊を離れることができた。方角も判らないまま夜道を急いだ。夜が明けてよく見れば我々と同じ行動をする何組かの同志があつた。

集団行動は避けていたが、中島曹長（鹿児島県）が加わり四人となつた。途中で避難する在留邦人や朝鮮人の人たちと出会い日本の敗戦を知らされた。

無条件降伏、軍隊は解散と聞いて驚愕した。初めは

デマではないかと疑つたが天皇陛下下の放送があつたことなど真実のようであつた。これまでは隊長の後を追つても無駄と思つたが、今さら引き返すこともできない。この上は運を天に任せ北朝鮮経由で帰国するほかはないと決断した。

北朝鮮の上三峰へと向い、昼夜ブツ通して歩き続け、言語を絶する苦闘の末、十九日の未明ようやく豆満江河岸に到達することができた。鉄橋は日本軍によつて破壊されたと聞いていたが橋はまだ完全であり、ソ連軍もまだ進出していなかった。何の障害もなく無事に対岸の上三峰に至ることができた。た。

連日の走るような強行軍に疲れはてた体を休めて死んだようにぐっすりと眠つた。目を覚ましてから今後の行動について話し合い、その結果中島曹長が清津にある知己のもとに行くこととなり、われわれは急ぎ南朝鮮に近づくため会寧方面に向けて出発、ここで中島曹長と別れることになつた（復員鹿児島地方世話部から中島氏の消息について照会があり前記のことを報告し

た。

これから先は武装した軍服姿では行動が困難となるので、普通の民服と交換するため住民と交渉した。その当時までは一般住民も軍服との交換を喜んで応じてくれたのである。

夏であるから薄い鮮服に中古の地下足袋、飯盒の代りに小さなアルミ鍋、塩と味噌を貰い、雑囊には着換えのシャツ類、靴下に詰めた米等を携帯していよいよ北朝鮮を突破して帰還することになった。

地理は皆目わからない。軍で支給された金は通用しない。とてもたやすく祖国に帰り着くことはできないと最悪の場合も覚悟に入れて、ただ一歩でも二歩でも日本に近付くことだけを考えて歩いた。また私は農業の経験があるので働きながらも帰ればよいとも考えていた。

会寧近くになるにつれて、村々では赤い腕章をつけた保安隊が結成されて要所を警戒している様子であった。ある村では部落が集まり牛を殺して日本の統治から解放されたと、戦勝の祝盃をあげている光景も見受

けられ、われわれは慄然となった。会寧に入る直前保安隊に追い付かれ捕まりそうになったので、三人はバラバラになり山の中に死ぬ思いで逃げこんだ。芹田君とは後で一緒になったが久保軍曹とは別れてしまった（久保軍曹は捕まって古校山収容所からソ連抑留となり昭和二十三年ごろ帰国された）。

二人となりあまり山の奥深く入り迷い込んでしまい、二日二晩山中をさまよい太陽を羅針盤に木の枝を折ったりして南を確かめながら、乍ら近くに下り人目を避けながら進む中、ソ連軍の装甲車やトラックが砂埃を上げながら南下して行くのを見ては道を教えられすることもあった。

靴下に詰められた米袋も残り少なくなったので畑に作られているカボチャやトウモロコシを無断でいただき、空腹を満たして行くうちに、在笛邦人の避難民と行動を共にするようになり、女や子供を世話することとで食べることも助かった。とにかくただ先へ進むことが精一杯で、日時や地名は全然覚えていない。

一行は咸興に出ることになり、高い山を越えねばな

らなかつた。山は夏というのに夜は洗った子供のオシメが凍りつくような寒さの中でムシロや糞にくるまり、震えながら眠れぬ夜を過ごしたこともあつた。避難民の人は足が遅いので我々は追い越しながら暑い中を歩き続ける。喉も乾き、生水を飲み激しい下痢となり、疲れはて、一時は歩く気力もなくなりかけ、芹田君の征露丸で回復し、元氣を取り戻し歩き続けた。道に捨ててあるメントアイの皮を拾い集めては煮て食べた、リングゴの皮を拾って食べたりにして飢えを凌ぐこともあつた。また民家の人から恵んで貰うこともあつた。

威興の近くなるにつれて避難民も多くなり、夜、学校の講堂等に泊まるときは女の人は、机や椅子を隅の方に高く積み、困いをしてその中で眠るようにしていた。

威興から元山に向かう途中に鉾石を運ぶ軽便鉄道があつて避難民輸送に運行されていた。運よくそれに乘ることができて一気に元山駅まで到達することができた。元山駅は避難民で混雑を極めていた。元山から京城に行く京元線は軍用列車だけが運行されていたが、

後尾に数両の貨車が避難民輸送のため連結されていた。

乗車は朝鮮人優先であり日本人の乗車はなかなか許可されなかつたが、ホームの混雑を利用して発車間際の列車に飛び乗って突き落とされそうになるのを一生懸命しがみ付いているうちに列車が発車してしまつた。貨車の外側の扉につかまりながらこれで京城まで行けると思えば手の痛みや足の痛みにも耐え抜かれた。しかし、列車は途中鉄原駅で停り、それより南は軍用列車だけの運行となり、一般乗客は全部降ろされてしまつた。

そこには検問所が設けられており日本人は隔離され留置されてしまつた。ここで捕まつては大変と、芹田君と話し合い別々に用便に行くふりをして、混雑の人の群れに紛れ込んだ。薄暮の中で服装も汚れた鮮服であつたので追跡もなく逃げ出すことができたが、芹田君とはここで別れてしまつた(芹田君は私より二ヵ月遅れて二十年十一月に復員した)。

ただひとりとなり鉄路づたいに歩きました。それか

らは保安隊に脅えながら幾日歩いたか、食糧はどうしたか今は覚えていないが、民家の人の恵にたよったのであろう。

東豆川までたどりついたら、途中人から聞いたことでそこには大きな川が流れていて、鉄橋も一般の橋もソ連軍の検問所があり日本人は捕まってしまう、渡場があるから舟で行く方が安全と教えられた。渡場にきて渡してくれと頼んでも舟賃をもたないので渡してくれない。途方にくれているところに、赤い腕章をつけた保安隊員が現われ屯所に来いと連行を求められた。いくら弁解しても聞きいれてくれない。ここまできて捕まると今までの苦労は水の泡。かといって逃げ出すこともできず悲痛な思いでついでいった。

途中で前方から復員してくる若い兵隊に出会った。保安隊員は何か鮮語で保安隊員と話し合っていたが、私に向かってどうしたのかと尋ねたので正直に今までの経過とお金を持たないので渡してくれないで困っている処を連れてこられた事情を話して助けを求めた。若い兵隊は何かニコニコしながら保安隊員に話して私

を渡し場に連れて行き、船頭に渡し賃を払い私を渡すよう頼んでくれました。私は嬉しくて涙がこぼれそうになり、繰り返し札を述べました。この親切な若い兵隊さんの好意は私の救い神として忘れることはありません。

無事対岸に渡って驚いたのは保安隊もいなく民家の人はみんな親切にいたわってくれた。その時は何も判らなかつたがそれが三十八度線だったので。

思えば図們を出てから二十数日、野に伏し山に寝ることもあり、食うや食わずの逃避行の中で、人の情に助けられ、こんなにも早く南鮮の地を踏もうとは夢にも思わなかつた。数日後に京城に入り居留民団の温かいお世話で衣服も整え、乗車券もいただいて釜山經由仙崎に上陸して、九月二十日懐かしのわが家に復員することができた。